

1月17日(土) とんど焼き



今年一年、無病息災願います!!



ふう～
してね!



いただきまーす (^_^)



どんな味がする?



みんなで食べるとおいしいね



ひいえー! 出ちゃった



ぼくの顔はどうかなあ?

1月22日(木) 男性料理教室



手が震えらあね



おいしい料理の出来上がりです



ごちそうを前に、皆さんいい笑顔ですねえ!



次は何を
洗おうかな



私の作った料理の味はどんなかな?

春野菜作り教室

※ 日時 → 2月10日(火) 9時より
※ 場所 → 小ホール
※ 講師 → 峠田 等

ひだまり

一月二十一日、黒人初のバラク・オバマ氏が米大統領に就任し、アメリカに新しい風が吹き出した。
日本はどうだろうか? 不景気で就職難の中国国民の気持ちに不安定な上、年齢に関係なく色々な悪質事件が、テレビから流れない日はない。
日本も今、大きく「チェンジ」の時代にきていると、家庭を守る主婦の私でさえそう思う今日この頃です。
一月十七日に、公民館で第一回目の「とんど焼き」を行いました。たくさんの方に参加していただき、なごやかな雰囲気の中で子供たちや地域の人たちとぜひいをご馳走になりました。
こういう場こそが、地域全体の顔合わせでもあり、安心して暮らせる子供たちの生活の場でもあると思う。
公民館に「また来てね」と言いたい私です。
(石川)

古和の里 川がたり 新春スペシャル

第六話 ドウハチ小僧

下古和 石川正史

江戸時代、古和の里、万ノ木堰(ばんのきいで)…。今年の正月三日は、吹雪であった。ここ数年は、穏やかな小春日より恵まれ、魚たちはウナギの紋次郎宅に集まって酒を飲むのが新年の恒例であったが、今年は天気と申し合わせたかのように、様相が一変していた。

米国を主とする外来魚が、日本古来の礼節や助け合いの精神を、粉々に破壊したのだ。その上、世界的な異常気象の影響で、秋を過ぎる頃から食料の不足がより深刻になった。魚たちの心は乱れ、通りにはごろつきどもが横行し、不穏な空気が漂っていた。いつもなら、無邪気に浅瀬で遊ぶ小魚の姿もすっかり影をひそめていた。

実際、雪の舞い散る師走にはいると、住民たちを恐怖のどん底に落とし入れる残虐非道な押し込み強盗が、続けざまに起こった。

今という警察署長の任にあるスポン太郎は、部下の者に正月休みを返上させて、必死の探索を命じた。その徹底した取り締まりで、悪党どももかみつき、亀と恐れられている太郎だが、この時はまさしく執念の亀と化していた。探索は困難をきわめ、年が明けて十日が過ぎ、ようやくその下手人とおぼしき者が逮捕された。

井川の一本桜をねじろにする大盗賊、「かじかの胴八」本人と思われた。その顔は、まさに鬼瓦を思わせ、冷たいギョロ目は龍のごとく、腹には四本の太い刺青をいれている。体のあちこちに刀傷があり、本来なら両方のえらぶたにトゲがあるのだが、片方をえぐり取られていた。

半月後…。外は、ぼたん雪が舞っていた。むろん、川の中から見上げるだけだが、そこそこの風情はある。

太郎はこの日、かじかの胴八が、いまだに容疑を認めぬどころか姓名すら名乗らぬと聞いて、様子を見に来たのだった。岩陰からそっと牢をのぞいてみると、その顔にどこか覚えがあるのだが、どうしても思い出せず、部下にねぎらいの声をかけて岩場の役宅に戻った。

夜になると、雪は冷たい雨に変わっていた。冬の雨は豊かな食料を運んでくれるわけでもなく、多くの魚たちにとって、ただ耳ざわりなだけである。

太郎は役宅に戻ると、茶碗酒をやりながら記憶を探ってみた。一人身なので酒の肴は自分で作るが、今夜のハイゴの甘露煮は出来だ。ほろ酔い気分になり、不覚にも茶碗をつかみ損ねて落としてしまった。がちやん…。「うむ、そうかっ! あの時的小僧だ、あの時の…」ぱしっと、膝を打った。

かれこれ二十年も前のことである…。

まだ御部大堰もなく、万ノ木堰も景気がよかった。通りには魚が行き交い、様々な店が軒先を連ねていた。

瀬戸物を扱うナマズ屋もその一角にあり、店先には多くの商品を陳列していた。その中に、大きなはんどが往來にせり出して置いてあり、少なからず通行のじやまをしていた。はんどとは、大きな水瓶のことである。

「おやじーっ、おやじーっ」 子供の声がする。

奥にいたナマズおやじは、またいつもの悪ガキたちだと、食べかけのミミズ饅頭をくわえて表に出ると、薄汚いなりの子供が一人、偉そうに腕を組んで立っていた。

「おやじっ、このはんど、じゃまだぜい」

「客でもねえおめえに言われる筋合いはないが、ほれこのミミズ饅頭をやるから、とっとと失せろ」

「なんだとう、おいらは客だぜい。おやじっ、このはんどを売ってくれろ」

「何をいいやがる、銭もねえくせに。それにおめえ、どうやってそれを持って帰るつもりだい? とてもじやないが、抱えられねえぜ」

集まりだした野次馬を、ぐるりと見まわしてから、「へい、それ、おいらだけで持つてけえたらタダにしてくれるかい?」

ナマズおやじは、売り言葉に買い言葉で答えた。

「あーいいとも、おめえが抱えたらタダでくれてやる」

子供は待つてましたとばかりに、近くにあった石ころをつかむや、はんどに投げつけた。がしやん…。

「こらっ、なにをしゃがるんでえ。食っちゃもうぞ」

怒ったナマズおやじが大きな口を開けて押し倒した。「なんでい、おいらは持つてけえるとは言ったが、一度にとは言ってねえぞ。小さくして何回かに分けて持つてけえらんないっ」

「ちげえねえ!、そのとおりだぜ!」 野次馬のかけ声でさらにいきり立ったナマズおやじが、子供の頭にガブリと噛みつこうとした時、チャリンと音がした。

「おやじ、これで許してやっっちゃくれねえか」一部始終を見ていた若き日の太郎である。

「へい、そりあ、ようがすが…」 ナマズおやじはいくらか多めの銭を拾い、子供をひとらみして片付け始めた。

太郎は子供の泥を払ってやりながら、

「小僧、名前はなんだい?」

「礼は言わねえぜ。おいらあ捨て子だい。名前なんぞ知るもんか。仲間はドウハチ小僧って呼んでるぜ」

と答えた瞬間、太郎は子供の右のえらぶたにかみつき、そのトゲを食いちぎった。

「さあさ、もう、こんな悪さをしちやあいけねえよ」

太郎は、痛さと怖さで泣きじやくる子供の頭を撫でながら、いくばくかの銭を握らせてやると、また市中見回りに戻って行った。

数日後…。太郎は、かじかの胴八を牢から出し、前に座らせておいて、しばらくじっつと見据えた。

やおら…

「おい、ドウハチ小僧。久しぶりだなあ」

声をかけるや、飛びかかざまに左のトゲを食いちぎった。

へなへなとへたり込んだ胴八は、太郎の顔を見て観念したのか、おれの犯した悪事を洗いざらい白状した。

二十年前、あの後、もう少し気にかけてやっておれば…、その夜、太郎は深い後悔の海に沈んでいた。

「やつを悪党にしまったのは、俺かも…しれねえなあ」

低く唸って、ぐびっと酒をあおるのだった。

終